SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

多職種間における協働のためのプリントコミュニケーションの開発提案

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛田, 直和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007228

多職種間における協働のための
プリントコミュニケーションの開発提案

飛　田　直　和

1　はじめに

本研究は、学校教育に携わる教職員が組織の一員としての役割を果たしながらも、職場における多職種間のコミュニケーションを大切にしていくことを問い直そうとするものである。

学校教育を取り巻く環境の変化の中で、教育の専門家である教師の「個業化傾向」が指摘される中（佐古 2005）、日常のつながりや対話を促進するものとして、コミュニケーションツールとしてのプリント（職員室だよりなど）に注目した。その開発・実践の提案をすることで、個々の職員の内在する改革要求（やりがい）を高めていくとともに、多職種間における協働意識の向上を図ることで、教育活動の充実につなげていくことを可能にしようと考える。

また、実践的有用性への具現化として、「共通理解を図る」「推進する」ことを目的とし、主に教務主任が発行する週報に、学校教育に携わる様々な職種の苦労など、「気づく」「焦点化する」「共有する」要素を取り入れ、多職種間をつなぐ視点がプラスされたものとして提案する。

（１）問題の所在　－政策的背景から－

平成 20 年 3 月に新学習指導要領が公示され、小学校では平成 23 年度、中学校では平成 24 年度から完全実施となる。そして、子ども一人一人に必要とされる力が新しい形で示されたのと同時に、それを育成する教員の側の力量も高めていこうとする国の姿勢から、教員として必要な資質能力が保持されるよう、教員免許更新制が導入された。社会の要請に応えて、教員としての必要な資質・能力の一層の向上が図られることを求めている。また、「学校評価ガイドライン」(2008) による学校評価の推進、校種間を超えての連携、地域との連携、新学習指導要領に基づいた言語活動、道徳、食育、環境教育の推進など、多くの教育課題と、各学校内での日常的に起こる諸問題を、現在の学校は抱えている。

このような学校教育における環境の中では、図 1 に示したように、本来学校内の職員がもつ内在的な向上意識を、外在的に求められる要因が大きく上回りつつある。内在的要因の共有から生まれる協働意識以上に、外在的要因がもたらす個業化の傾向が大きいことが、現在の学校・教師がかかえている状況ではないだろうか。そのため、教師をはじめ、多職種で構成される学校職員の一体感が生まれにくい現状がある。

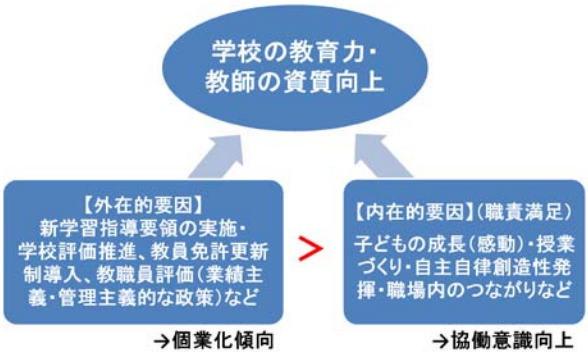

図１　現在の学校・教師がかかえている状況のイメージ(作成：飛田)

平成 17 年 10 月の中央教育審議会答申では、「教師には、子どもたちの人格形成にかかわる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。」としている。

これらを総合的に考えた時、職員の内在的な改革要求を高めていきながら、外在的な要因も受け止め、よりよい方向へ向かっていくことが必要といえる。教員個々の教科指導、生徒指導等の技術力向上だけでなく、基盤となる各学校内のチームワーク、協働意識の向上が重要なのである。

（２）問題意識　－学びのストーリーから－

大学院入学前の平成 20 年度、筆者は教務主任として小学校に勤務していた。教務主任として意識していたことは、「子どもたちのことを考えた教育課程の信頼される推進者となり、各担任、担当が誇りと充実感をもって、仕事ができるようにしよう。」ということであった。その具現化のために、「教員間のコミュニケーションの活性化」に力を注いでいた。

平成 21 年度、教職大学院に入学するにあたり、「全員野球がしたくなるチームづくりのために何が（教務主任としての）自分にできるのか見いだしたい。」「そのために必要な伝える力を向上させたい。」というこの２つの思いを抱いて、筆者は学びをスタートさせた。１年次に滞在した小学校では、事務職員、用務員などが、「一人職」として、教員が多数をしめる学校組織という独特な社会の中で苦悩を感じながら働いている姿を目の当たりにし、現場教員の視点のみで、学校の教育力の向上を目指していく在り方、子どもの支援体制を確立していく在り方に強く問題を感じた。全職員がチームを組んで、子どもたちを支援していくために必要となる協働意識について、より強いものにしていくための働きかけの具体を探りたいという思いが、２年次になり一層強くなったことが本研究へ取り組むきっかけである。

２　学校内における職場の雰囲気、リレーションづくりの状況

学校教育法にも明示されているように、学校は校長、教頭、教諭、養護教諭、栄養教諭、事務職員、用務主事、給食調理員など、多職種によって組織されている。教員の視点から学校組織を見てみると、教員の仕事は何をどうしているかがお互いに見えやすい。それに対して、教員以外の職員の仕事は、定式化し地道に繰り返されていく性格が強く、目に触れにくい面がある。

職員間のつながりについて、佐古（2005）は、子ども、保護者の意識と行動の変容、多様な教育施策・制度による教育活動の困難さや複雑さなどを背景とし、他律感を肥大化した教師の「個業化傾向」を指摘している。また、久我（2010）は、この個業化が進行することにより、職員の協働意識が低下し、学校の組織力が弱まっていることを指摘している。筆者は、職員間のつながりを強くし、良好な人間関係を築いていくことが、主体的な教育活動への取り組みを活性化させることにつながると考えている。職場における職員のリレーション（良好な人間関係）づくりについて、藤原（2007）は、「雑談・対話」、「視線・まなざし・雰囲気」という２つの要素が重要であると述べている。本研究では、後者の「視線・まなざし・雰囲気」にポイントをおき、全職員に対してのプリント（職員室だより）というツールを通した間接的コミュニケーションに注目し、その可能性について研究を進めていく。このリレーションづくりが、多職種間における協働意識を高めていく上で、重要であると考えるからである。管理職を含めて教員は、自ら経験のない事務職員や用務員など、いわゆる「一人職」とのリレーションづくりが苦手という場合が多い。「対話・雑談」のように、直接的なつながりをもつことはできないものの、職種間の見えない壁を低くし、より多くの職員同士の間において、「対話・雑談」を促進するツールとなるよう、その内容や表現の仕方などが考えられたものとなるよう目指していく。さらに、学校内の大人同士の結びつきが強くなることで、子どもたちの学校生活が豊かになることを見据えていく。

3　研究の目的

全職員を発行の対象とした紙媒体のプリントツールを、定期的・継続的に発行する中で、発信者である筆者と受信者との間だけでなく、受信者同士の間に成立する交流を「協働のためのプリントコミュニケーション」として定義する。本研究は、多職種（条件整備に重きのある職員から学級担任まで、学校に通う子どもたちに携わる全職員）が一体感をもち、同じベクトル(方向)で子どもに教育を行っていこうという協働の意識を高めていくことを主目的として実践を進めた。

4　研究の概要

（1）アクションリサーチの方法と内容

アクションリサーチとは、実践問題を行動科学の概念と方法を適用することによって、解決することを目的とした研究であると、久我（2010）は論じている。対象の問題解決やその過程に携わりながらの（参加型）研究である。本研究では、筆者自身が外部人材として小学校に滞在し、教育活動や児童の支援に参加していく中で､アクションリサーチの考えを基盤としながら応用し、教務主任を経験した第三者としての視点をもち、実践していく手法をとることにした。

Ｓ町立Ｎ小学校に平成 22 年 4 月から平成 22 年 12 月まで週 1 日滞在し､職員として様々な教育活動、児童への個別支援に携わりながら、学校組織の中での多職種間のつながりを観察・分析する。観察、インタビューを通し、職員間のつながりが薄いと感じられた部分を職員室だより「かけはし」の題材とする。Ｎ小学校の前期終了日まで、全職員を対象とし、定期的（隔週）に発行していく。間接的なつなぎを図っていくことで、協働意識の向上をサポートする。各プリントについては、４つの段階（①観察をする②インタビューをする③プリントを作成、発行する④効果をはかる）を、４週のサイクルとし、２つの題材を同時進行で行う。また、プリントによるコミュニケーション効果について考察を行い､その有用感を確かめながら研究を進めていく形とした。

久我がまとめたアクションリサーチの概略的な方法論（過程）に、「各プリントによるコミュニケーションの実際の過程」を重ねたものを示したものが表１である。「各プリントコミュニケーションの実際の過程」における①～④の段階をＰＤＣＡサイクルとも考え、同時に明記した。

表１　協働のためのプリントコミュニケーション過程

アクションリサーチの概略的な方法論（過程）	各ﾌﾟﾘﾝﾄｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝの実際の過程
①体系的なデータ収集とそれに基づいた実態の把握 ②問題の同定と課題の設定	①｢観察をする｣Plan
③原因の分析と構造的な解釈 ④打開策とその行動計画の策定	②｢インタビューをする｣Do
⑤実行とその評価	③｢プリントを作成・発行する｣Check
⑥課題の再設定	④｢効果をはかる｣ Action
※各プリントコミュニケーションの実際の過程①～④が､螺旋状に循環する体系的な多段階の過程によって構成される。	

アクションを重ねていく中で、プリントの内容の改善などにより、筆者自身がファシリテーター的存在（相互理解を促進する役割）として、成長していくことも目指す。週に１日のみＮ小学校に滞在する筆者が、多職種間に組織レベルの協働を少しでも促進できるよう、研究の過程の中

でも「まず、様々な教育活動、場面に参加すること」を心がけ、実践していく。職員室だより「かけはし」の題材については、Ｎ小学校における初期の観察から「養護教諭、学校栄養士、支援員、事務職員、用務員、特別支援教育コーディネーター、初任者」に寄り添う内容とする。

職員室だより「かけはし」の作成に際しては、職場の士気をあげ、一体感を強くするためのプリント作りのポイントを「感動を伝える」「感謝を伝える」「心からほめる」「ねぎらいの心をもつ」「平等である」の５つとし、肯定的な文章を心がけていくこととする。主として、学校組織の中で多数をしめる教員の気持ちを揺さぶり､職種を超えた協働意識を促進していくとともに、個々がもつ内在的な改革要求を高めていくことも目指していく。この５つのポイントが、受信者である全職員に伝わるよう、プリントの内容においては２つのことを配慮していく。「一人職が子どもたちのために、その役割を果たしているエピソードや写真を盛り込むこと」「受信者の多くが知らない一人職の本音を肯定的にとらえ、知らせること」である。これは、「読み手の気持ちに書き手がなる」ということでもある。ここに大学院での授業や専門書から得た知識、新しい視点を加え、受信者とともにインタビュー協力者の心もプラスになるようまとめていく。多職種間を間接的につなぐことが、協働意識の向上にプラスの効果があるのかを明らかにしていく。

（２）アクションリサーチの経過　－プリントコミュニケーションの実践－

Ｎ小学校におけるプリントコミュニケーションの実践は、表２の通りである。実践では、読んでいて心が和む同僚のエピソードに加えて、受信者が考えさせられる内容を少し盛り込むことによって、「受信者同士が内容について語り合う」「自校の課題が見えてくる」ものとなり、組織の活性化を促すことを目指した。資料１は、実際の職員室だより「かけはし№４」である。

表２　Ｎ小学校におけるプリントコミュニケーションの実践

実施時期	実践名	実践内容
平成22年4月1日 ～4月16日	①地域を題材に職員の協働意識を生む働きかけ	Ｎ小学校校区のフィールドワークを行い、様々な場所を写真で記録した。Ｓ町のホームページや史跡についてのパンフレットなどをもとに、職種を超えて共通の話題となるよう「地域」をプリントの題材とし、提供することで、職員の協働意識を生むことを目指すと共に、筆者自身が地域のことを「自ら知ろうとする姿を示す」ことを意図した「かけはし№１」を作成、全職員に配布した。
平成22年4月1日 ～4月23日	②自己開示を題材に教職大学院の実習に対する職員の理解を図る働きかけ	筆者自身の自己開示を題材とした「かけはし№２」を作成、全職員に配布した。外部人材である筆者が、同僚として職員から認知されるプロセスとしての時間と場の共有を図り、この後のアクションリサーチが実践しやすい雰囲気を構築することを目指した。筆者とＮ小学校職員との間の相互理解が深まった。
平成22年4月16日 ～5月2日	③養護教諭と職員の協働意識を高める働きかけ	養護教諭に寄り添うことを心がけ、観察で得た子どもとのエピソードや、インタビューで感じた職員への感謝の気持ちを素直に伝えることを目指すとともに、養護教諭の苦労に対して、感謝の気持ちが受信者となる職員から自発的に生まれることを目的とした「かけはし№３」を作成、全職員に配布した。
平成22年5月28日 ～6月18日	④学校栄養士と職員の協働意識を高める働きかけ	学校栄養士を観察・インタビューする中で感じた「食」に対する強い思いや、食事の時間に各学級を参観したり、時には配膳を手伝ったりというエピソード、「食」に対して細心の心配りをされている苦労を、特に教員に対して素直に伝えることを目的とした「かけはし№４」を作成、全職員に配布した。（資料１）
平成22年6月11日 ～7月2日	⑤支援員と職員の協働意識を高める働きかけ	教員からは見えにくい支援員の仕事や苦労が見えるようにし、支援員が教員に対して感謝の気持ちをもっていることを伝えた。時間勤務の中で自分の役割を果たそうという責任感、使命感が強い支援員を「当然」ではなく、「すごさ」として教員が感じられるような「かけはし№５」を作成、全職員に配布した。
平成22年7月2日 ～7月23日	⑥事務職員と職員の協働意識を高める働きかけ	観察・インタビューでは、事務職員に寄り添うことを心がけ、事務職員の仕事、教員の仕事をそれぞれ肯定しながらも、事務職員の願いが教員に届くような構成、事務職員の苦労に対して、感謝の気持ちが受信者となる職員に自発的に生まれてくるような構成の「かけはし№６」を作成、全職員に配布した。
平成22年7月9日 ～7月30日	⑦用務員と職員の協働意識を高める働きかけ	用務員が校内の様々な場所で活躍している場面、教員から見えにくい仕事や苦労、一番のやりがいという「花壇」のエピソードから、子どもたちへの思いが伝わるように文章を構成した。「チームの一員」という気持ちが、職員から自発的にわき上がってくることを目指した「かけはし№７」を作成、全職員に配布した。
平成22年9月17日 ～10月8日	⑧特別支援教育コーディネーターと職員の協働意識を高める働きかけ	特別支援学級の担任が、子どもたちへどのような姿勢で支援をしているのかがわかるエピソード、写真を中心にし、通常学級を担任する教員が、そこから自然に学べるような構成をこころがけ、その中でコーディネーターの苦労や体制についての課題も共有できる「かけはし№９」を作成、全職員に配布した。
平成22年10月1日 ～10月22日	⑨初任者と職員の協働意識を高める働きかけ	初任者Ｒ教諭の直向きな姿と、温かいＮ小学校の雰囲気がＲ教諭の成長につながっていることを、肯定的に伝えていく構成を目指した。初任者指導や学年部の職員の気持ちも共有できるよう考え、後期の教育活動に向けて、向上心と協働意識がもてるように意図をした「かけはし№10」を作成、全職員に配布した。

5　成果と課題、提案

プリント全体によるコミュニケーション効果を、数値による客観的な変容ではなく、職場の中で確実に芽生えた一体感を、具体的に言語化した職員の声、それを考察したもので示していった。得られた成果としては、次のようなことがあげられる。

①渡されたプリントを手に、プリント内の写真や文を指でなぞりながら話をするなど、職種を超えた「対話・雑談」の促進につながった。

②互いを理解し合うきっかけとなり、それが他者への感謝、尊重の気持ちとなって行動にも表れた。

③②の雰囲気を感じた「一人職」の自己肯定感や責任感の向上、内在する改革要求の高揚に結びついた。

④相手の成長や困り感に合ったアドバイスやかかわりをするというメンタリングのよさが、職員集団の中に広く浸透しはじめた。

⑤発信者と受信者が共に学び合い、視野を拡大することができた。

資料１　職員室だより「かけはしＮＯ．４」

先日、4月に入学をした教育学部の1年生に、なぜか授業（？）をしました。驚いたのは、その時、現在在籍している小学校で教えた教え子に再会したことです。「6年生で教えてもらって、大学1年でまた教わるとは思わなかった。」「こちらもです。」思わぬ出会いにうれしくなりました。

かけはし　静岡大学教職大学院だよりNO. 4　　平成22年6月11日

昨年度は静岡市の小学校で実習をしました。静岡市の先生方も私たちと同じように子どもたちのために日々がんばっています。（さすが政令市だな）と感じるところもたくさんありました。子どもたちが給食を楽しみにしている姿も同じです。あつあつでおいしい給食は、N小学校の自慢でもあると思います。今回は、毎日600人以上の食を支える学校栄養士のDさんにお話を伺いました。

「みんな、おいしい？」給食の時間です。笑顔のDさんが教室へ入ってこられました。子どもたち一人一人に語りかけながら、全体のようすを見て回ります。給食を食べる子どもたちと作る側がお互いの顔が見えるという自校給食のよさを生かし、子どもたちの「食」への関心が高まるよう、やさしく指導してくださいます。

今日の1枚「給食の風景」

子どもにとって一番楽しい時間をプロデュースしています

そんなDさんのよろこびは、「おいしそうに食べる子どもたちの笑顔を見た時」「給食ファイルに書かれた子どもたちの言葉を読む時」「残量の少ない時」「調理員さんと協力し、献立をおいしく作ることができた時」などです。

苦労されていることは毎日が時間との戦いであること、何よりも気を遣われているのが衛生管理です。O-157食中毒事件があり、平成8年から衛生管理が一層厳しくなっています。そのため下ごしらえでは、その日調理する野菜を6回も洗ってから切るそうです。食べ終わった器具は5回洗ってようやく明日の準備となります。これから暑くなるので、特に神経をつかうことでしょう。

さて、給食室はDさんも含め、5人チームです。調理員さんを紹介していただきました。楽しいお酒が大好きで、小学生のお子さんをもつSKさん。明るくおおらか、宝塚が好きというURさん。いつもパワフル、映画やミュージカルの好きなINさん。そして、本年度からN小学校に仲間入り、すぐにとけこみ、ちょっぴり天然というSSさん。「子どもたちのために少しでもおいしい給食を！」と、まさにチームで仕事をされています。

人との出会いが奇跡なら、食との出会いは必然です。これからの未来を担う子どもたちに食べることの楽しさや大切さを伝えてくださるDさん。

7月がひとつの区切りとなります。これからもよろしくお願いします。（文責：飛田）

このように、多職種間における互いの信頼関係が増した職員集団と、個々の職員の人間力向上により、子どもたちの成長を支える学校の内部環境が豊かに変容したことが成果であろう。

実践では、プリント作成の目安を滞在日の時間内60分としていた。現場での有用性を考えた時、実際の学校現場でミドルリーダーが、この時間を毎週確保し、年間を通して継続できるかが課題となる。改善の方向が見えると、一般化に結びつけていく可能性も広がる。そこで、教員のリーダー的役割を担う教務主任が発行する「教務だより（週報）」に、多職種間をつなぐ視点がプラスされたものを、簡易に作成できるよう資料２のようなモデルを提案することで、普遍性をもたせていくようにする。その効果については、本研究によるプリントの効果と同様のものが予想される。さらに、教務主任自身がやりがいを感じながら週報を作成をする中で、ファシリテーター的要素を備えたリーダーとして成長していくことが期待できると考えている。

資料２　協働意識の向上を目指した教務だより（週報）

教　務　だ　よ　り（週報）　　No.14　　6／30～7／6

日	曜	行事・諸活動・会議予定	出張等	提出物
30	月	朝読書 幼稚園交流(5年)10:00～11:00N小 全体研究授業(6年部実数：)5校時 ※小中連携授業公開(C中3名、D小2名参観) 全体研修15:15～第二会議室 ・出席講習出（6月授業日数21日） ・支援員F、G、H、I、ALT勤務	1年 2年 3年 現 行 切 4 4 5	4年 5年 6年 現 行 切 5 5 5 育成学級新設希望調査(教諭) 著作権講習会参加希望(B) 不登校担当教員研修募集(D) 学校教育情報化実態調査(E)
7/1	火	朝打ち8:00、朝読書 委員会活動 学年部会 ・減面袋配布 ・支援員F、G、H、I、ALT勤務	1年 2年 3年 現 行 切 4 5 5 市校長会小学部研修会(校長) 14:00第一地区C 書写研修会(教諭) 15:00教育会館 給与事務打合せ会(P) 9:30静浦地区C 小中連携研(Q)13:45R小	4年 5年 6年 現 行 切 5 5 5 社会科副読本支払い報告書(Y) 小中体育実技研申込(Z)
2	水	読み聞かせ(低) 4年ホーム交流14:00～15:00 6年社会科見学(鎌倉) (引率:校長、6年部) 下校指導(1年部、2年部) ・M中職員来校13:30 ・養護教諭10年研(校内研修日) ・支援員F、G、H、I、ALT勤務	1年 2年 3年 現 行 切 5 5 6 学校保健研修会(S) 14:30教育会館 小中連携研(Q)13:45D小	4年 5年 6年 現 行 切 6 6 6 月例報告(V)
3	木	朝読書 研修日15:30～ 下校指導(3年部) 生活科校外学習(1年)2、3、4校時O公園 (引率) ・教育相談日案内配布 ・支援員F、G、H、I、ALT勤務	1年 2年 3年 現 行 切 5 5 5 ネットワーク協議会(T)14:30K中 作文指導研(U)15:00教育会館	4年 5年 6年 現 行 切 5 5 5 月例報告(W) 地方教育費調査(X)
4	金	音楽集会(6年) 下校指導(4年部) 1年、2年大プール開放日 終礼16:15 ・南ブロック指導者講習会18:40 ・支援員F、G、H、I、ALT勤務	1年 2年 3年 現 行 切 5 5 5 特別支援教育研修会(V) 15:00教育会館 U市結核対策委員会(校長) 19:00教育会館 英語授業公開(A)13:00D小	4年 5年 6年 現 行 切 6 6 6 低学年学級支援勤務実績(教諭) 学校歯科保健に関する調査(S) 特別支援教育研申込(V)
5	土	週休日 隣接校選択制保護者説明会(文化C) 市津波避難訓練		
6	日	週休日 PTA奉仕作業予備日		

【チームN小　今週の1コマ】

梅雨があけ、子どもたちが元気に運動場で遊ぶ姿が多くなりました。「外で遊ぶ元気な小っ子」N小の自慢です。同時に、けがで保健室に来る子どもが最近多くなったと養護教諭の5先生が話しておられました。（写真）その一人一人に理由を聞いて、ていねいに接してくださっています。ありがとうございます。夏休みまで1ヶ月、大人も子どももけがのない笑顔で迎えられるよう落ち着いた生活を心がけていきましょう。校長先生、6年部も気をつけて鎌倉社会科見学（7/2）へ行ってきてください。

	1年計	2年計	3年計	4年計	5年計	6年計
現 行 切	23 0 0	24 0 0	26 0 0	27 0 0	27 1 0	27 1 0

6　研究から得られた知見

本研究の実践事例から得られた知見として、N小学校という限定された実践現場からのものであるものの、「コミュニケーションツールとしてのプリント活用の有効性の発見」「多職種間における協働意識の向上がもたらす学校の教育力への確かな影響」などがあげられる。

仮にプリントの内容が核心をついた正しいものでも、発信者が真摯な姿勢でなければ､受信者の心には届かない。役割や責任を果たす発信者の普段の仕事ぶりや受容的な職員とのかかわりにより、受信者はプリントに書かれている内容も切実に受け止めようとするのである。職員は自分の仕事に誇りをもち、日々ベストを尽くしている。「何を主題とし、なぜ今なのか」を受信者が受け入れられるよう、「読み手」になって書くことを目指したプリントが高い価値と有効性をもち、目的達成に向けて役立つことが明らかとなった。

また、本実践によって見られた職員集団の成長から、多職種間における協働が学校の教育力の向上にどのように結びついているのかを表したものが図２である。職員の意識と職員集団の雰囲気は相互に影響を与え合っていて、学校の教育力が向上するための大切な要因となるといえるだろう。

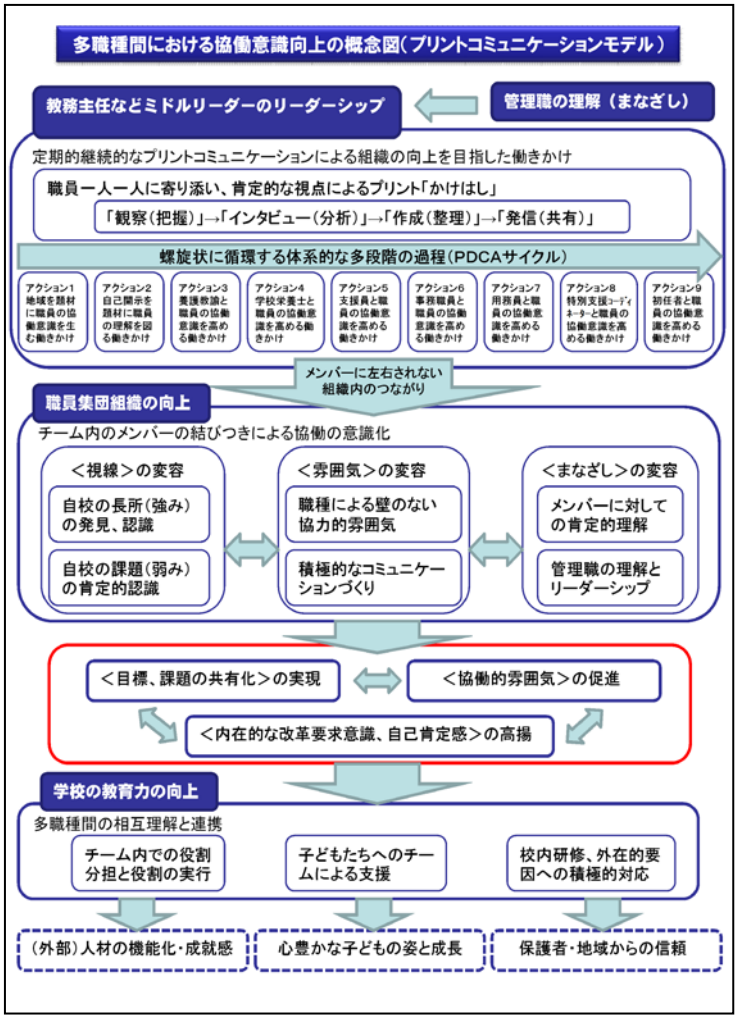

図２　多職種間における協働意識向上の概念図（作成：飛田）

7　おわりに　－今後の展望－

今後、多職種間における協働のためのプリントコミュニケーションについて、筆者が実践の場で活用していくこと、研修会などの場で広く提案をしていくことを考えている。「子ども同士のかかわり、コミュニケーション能力の向上」を問う前に、まず「それを支える大人同士のつながり」を問い直すことが重要と考えるからである。「協働」の大切さは感じながらも、急速に教育制度の改革が進んでいく中で、多忙化に直面していく教職員が、今後ますます個業化の傾向になることが予想される。この多忙ぶりが、一人職や外部人材に対する配慮を後回しにしていく傾向にもつながると思われる。本研究は、それに向けての実践事例としても記したものである。ミドルリーダーが職員全体に発信するプリント一つでも、雰囲気を改善していくことができる。プリントの題材から対話が生まれ、生きたコミュニケーションが円滑な人間関係の育成につながるのである。職種間を超えた協働により、互いを尊重し合う大人に支えられ、学校生活の中で生き生きと躍動する子どもたちの姿のために､今後も筆者自身ができることを全力で実践していきたい。